
経済学の概念

熊切信男 著

泉文堂版

著者紹介

熊切 信男

1917年 東京生

1941年 慶応義塾大学法学部卒業

現在 武蔵工業大学助教授

著書 「簡明経済学」

共著 「太平洋戦争原因論」他

3033—180020—3908

経済学の概念

昭和46年10月1日第1刷発行

昭和55年5月10日第8刷発行

定価 2000円

著者 熊切 信男

東京都新宿区下落合1-2-16

発行者 大坪 嘉春

東京都千代田区猿樂町2-6-3

印刷所 松沢印刷株式会社

東京都新宿区下落合1-2-16

発行所 株式会社 泉文堂

電話東京 (951) 9610 番
振替東京 5-13804 番
郵便番号 161



◎熊切信男 1978

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは法律で認められた場合を除き著者および出版社の権利の侵害となりますのでその場合には予め小社あて許諾を求めて下さい。

は し が き

前著「簡明 経済学」がはじめて世に出たのは今から5年前であったが、歳月の経過に伴う諸般の変化もあり、この度機会を得てほぼ全体を書き直し、ここに「経済学の概念」と題して新しく出版することとなった。

経済学の全般を簡単明瞭に考察するというその趣旨にはもとより変りはないが、今回の改版によって不足の説明を補い、問題点を新たに補足したので、内容はより充実したものと思われる。

元来、経済学は、封建制度のあとに発生した近代国家において、どのようにして国家の富を豊かにするかという、いわゆる「政治経済学」の研究からはじまったもので、その後政治から独立して経済学という一つの社会科学となったものである。

しかし今日のように資本主義と共産主義という二つの考え方が政治において対立するようになると、経済学は再びその基本的立場において政治との結び付きを余儀なくされるようになった。それがすなわち、いわゆる経済学と社会主義経済学という、立場を異にする二つの経済学である。

本書はしかし、これら二者の一方に片寄ることなく、より広い視野の下に立って、経済学研究の出発点となる基礎的な見方、考え方を扱ったものである。とはいえ、今日経済学上で扱われる問題は実に多項目にわたっているから、このような小冊子でその全てを扱うことはもとより望めないところである。本書の内容はあくまでも経済学の一つの骨子に過ぎない。

次に本書をまとめるに当たって特に意図したところは、経済学と実社会との結び付きである。もともと経済学という科学は、経済生活の実験的经验の上に組立てられた思考である。それが今日、ともすると理論のための理

論となって実体が忘れられ、その結果として無味乾燥なものになってしまう恐れがある。本書ではこの点を特に考えて「生きた経済学」となるように心がけた。実生活との関連付けによって、経済学が一層親しみやすいものとなるならば誠に幸いである。

よく経済学は難解な学問であるといわれる。その理論的研究はたしかにやさしいものではない。そこで本書では、はじめの部分はなるべくやさしい言葉を使って、スムーズに読み進めるように配慮した。

次に人名の仮名書きは大体一般的な読み方、書き方に従ったが、それぞれの理由で私独自の読み方、書き方にしたものが二・三ある。また巻末の人名索引は使用の便を考慮してカナで引くようにした。なお人名末尾の国名は国籍を示すものであり、ドイツ→イギリスなどはマルクスのようにドイツで生まれイギリスで後半生を終ったことを示すものである。

次に同じく巻末の参照法規は、本文理解のためにその正しい法的根拠を示したもので、条文の必要箇所の抜萃であり、読者の便を図ったに過ぎないものである。

本書をまとめるに当り、恩師吉田啓一慶応義塾大学教授から多大の御配慮をいただいたことを記して感謝の意を表する次第である。また本書の出版についてお世話になった泉文堂社長中村仙一郎氏をはじめ社員の方々、特に直接私との連絡の衝に当られた茅原要三氏の労と御好意に対し、厚く御礼を申し上げます。

1971年8月15日

川崎市片平の寓居にて

熊 切 信 男

目 次

第1章 序 論	3
1. 経 済	3
語義…3 効用…4 効用の種類…4 財…5 経済原則…6	
2. 経 済 学	6
本質…6 研究目的…8 生成…9 構造…11	
方法論…12 「経済表」…15	
3. 経 済 社 会	18
主体と客体…18 自由と秩序…19	
4. 欲 望	20
分類…20 特性…21	
第2章 生 産 論	25
5. 生産の概念	25
意義…25 分類…25 本質…26	
6. 生産要素	28
3要素…28 経営…28	
7. 自 然	29
意義…29 土地…30 「孤立国」…30 収益逓減法則…31	
8. 労 働	32
意義…32 労働とスポーツ…33 分類…34 特性…35	
量（人口）…36 「人口論」…37 質（能率）…37	
分業…38 分業の種類…39 分業の得失…40	

9. 生産手段	40
意義…40 資本…41 資本の分類…42	
10. 生産費の法則	43
大量生産の法則…43 大規模生産の法則…44	
11. 企 業	46
企業者…46 企業形態…47 公企業…47 私企業…48	
会社企業…48 組合企業…49 企業の集中…50	
カルテル…50 トラスト…51 コンツェルン…51	
集中の利害…53	
12. 生産方法の発達過程	54
経済発展段階説…54 商品生産…55 近代化の発生…55	
産業革命…56 第2次産業革命…58	
13. 活動分析	59
意義…59 線型計画…59 線型計画の原理…60	
ゲームの理論…61	
第3章 流通論	65
14. 価 値	65
価値の種類…65 価値論…65 限界効用価値説…66	
一般均衡論…68	
15. 価 格	69
意義…69 価格の決定…70 需要…70 需要の弾力性…71	
供給…73 供給の弾力性…74 価格と生産費…74	
結合生産費…76 市場価格…76 クモの巣理論…78	
独占価格…80 クールノー点…81 寡占価格…82	
フル・コストの原則…84 公定価格…85	

16. 貨 幣	86
本質…86 本位制度…87 金本位制…88 日本の制度…88	
硬貨…89 グレンシャムの法則…89 紙幣…90 預金貨幣…92	
貨幣本質論…92 貨幣価値と物価…93 貨幣の需要と供給…94	
貨幣数量説…95	
17. インフレーション	97
本質…97 史実…98 状況と種類…98	
インフレーション対策…99	
18. 貨幣の対外価値	102
対外価値…102 貿易決済…104 為替変動の諸学説…105	
19. 金 融	107
意義…107 金融機関…108 銀行…109 受信業務…109	
与信業務…111 特殊銀行…112 保険…113	
協同組合…113 金融政策…114	
20. 商 業	115
意義…115 商行為の変遷…116 百貨店…118	
スーパーマーケット…120 配給…120	
21. 貿 易	121
意義…121 必要性と必然性…121 貿易理論…122	
東西貿易…123	
22. 市 場	125
意義…125 証券市場…126 商品市場…127	
第4章 分 配 論	129
23. 国民所得	129
意義…129 三面等価の原則…129 二重計算…130	

再生産…130	所得の分類…131	所得の分配…132
24. 賃 銀		134
支払方法…134	賃銀学説…135	労働者の現実問題…139
失業…139		
25. 利 子		140
本質…140	資本利得…141	利子学説…142 利子率…144
26. 利 潤		144
意義…144	本質…144	危険負担説…145
利潤率平均の法則…145	独占利潤…146	
利潤率低下の法則…146	利潤学説…147	
27. 地 代		147
本質…147	地代学説…147	準地代…149
第5章 消 費 論		151
28. 家 計		151
消費経済単位…151	エンゲルの法則…151	
消費と貯蓄…152	消費関数・貯蓄関数…153	
29. 財 政		154
本質…154	公債…155	課税…155 会計年度…156
30. 消費の順序		156
限界効用均等の法則…156	消費者余剰…158	
31. 選択の理論		159
無差別曲線…159	限界代用率…160	
32. 消費革命		161
日本経済の成長…161	消費文化…162	

33. 社会保障制度	165
富者と貧者…165 理想と現実…166 日本の実状…166	
第6章 景気変動論	169
34. 静学と動学	169
与件の変化…169 巨視経済学…169	
35. 恐 慌	170
恐慌の歴史…170 販路の理論…171 過剰生産…174	
社会主義…174	
36. 景 気 変 動	175
変動の波…175 外部原因論…176 内部原因論…176	
景気対策…177	
37. 景気対策の理論	178
乗数の理論…178 加速度の原理…180 ラグ理論…181	
経済の成長…183 不均等発展の法則…183	
38. 産業連関論	184
産業連関表…184 投入産出表…185	
39. マネー・フロー分析	187
マネー・フロー…187 マネー・フロー表…188	
~~~~~	
恐 慌 表 .....	172
原著一覧表 (本文中の * 印) .....	191
参照法規 .....	193
事項索引 .....	205
人名索引 .....	215

## 肖像

スミス.....	10	フィッシャー.....	95
ケネー.....	15	リカードウ.....	122
チューネン.....	31	パレート.....	133
マルサス.....	37	ウィクセル.....	136
マルクス.....	41	J. B. クラーク.....	138
J. S. ミル.....	66	シュンペーター.....	143
ジェヴォンズ.....	67	マーシャル.....	158
メンガー.....	67	セ イ.....	171
ワルラ.....	67	シスモンディエー.....	174
ベーム-バヴェルク.....	77	ケインズ.....	180
クールノー.....	82		

# 経済学の概念



## 第1章 序 論

### 1. 経 済 (economy)

**語義** 「経済」という語は漢文の「経国済民」(国を治め民を救う)を略したもので、わが国でも既に江戸時代の文献にこの語が使われているが、明治になって福沢諭吉が英語の *economy* の訳語にこれを当ててから、今日のように広く一般的に使われるようになった。なお英語の *economy* という語はラテン語の *oeconomia* から、そしてこのラテン語はギリシャ語の *oikonomia* ← *oikos nomos* (家計の意) から変化したものであるという。この語源をみても解るように、われわれの生活の単位は一つの家庭であり家族である。これが集まって村となり町となり都市となり国家となって、そこにわれわれ人間が社会を形成し、共同生活を営んでいるわけである。

人間が生活を営むためには、その衣食住に多種多様の「もの」が必要である。これらは自然界から得られるが、自然界に存在する「もの」はそのままでは人間の役には立たない。われわれは自然界から採取したものに加工をし、必要な形や質に変化させてこれを利用する。このような行為が人間社会において一定の秩序と組織のもとに営まれるとき、これを「経済」という。

以上のように経済の客体が自然界にあるところから、経済行為 (*economic activity*) は人間対自然の交互作用であると考えられる。しかし多くの場合に経済行為は、何かの意味で他人との関係を持つものであるから、それはまた人間対人間の交互作用でもあり得る。ことに現代のように経済生活が複雑になると、われわれはもはや一時でも他人と無関係ではいられない。

だからロビンソン・クルーソーの⁽¹⁾ような孤独の生活は、経済学の研究対象とはならないのである。

「もの」が人間の欲望を満足させる性能を**効用** (utility) という。  
**効用**

しかし効用は人間の欲望の反射のようなものであり、「もの」自体に備った性能ではない。空腹な人にとって1片のパンは大きな効用を持つであろうが、満腹の人はそのパンに何の効用も感じないであろう。また空腹な人にとって1杯の飯は大きな効用があっても、1枚の紙片は何の効用もないのである。このように効用は欲望の存在によってはじめて生まれ、その強さに比例して大小に変化する。なお効用は、人間にその利用法が未だ知られていないものには存在しないが、人知と科学技術の発達によって、やがて新しく効用を生じるものもあろうし、またその反対に、昔は効用のあったものでも、時代の経過につれて効用の無くなるものもある。

**効用の種類** 効用が人間の欲望を満足させる方法の違いによって、それ

は本源的・形態的・場所的・時間的に分類される。本源的効用とは狩猟・魚撈・採鉱のような自然物の採取や植林・農耕・牧畜のような動植物の育成によって得られる効用であり、形態的効用とは1本の立木を加工して建築材料にしたり、鉄鉱石を精錬して銑鉄や鋼鉄とすることによって得られる効用であり、場所的効用とは米を生産地の農村から消費地の都会へ輸送するような、ものを有用度の低い場所から高い場所へ移動することによって得られる効用であり、時間的効用とは氷を冬にこしらえて夏の需要期まで貯蔵しておくような、ものを有用度の低い時期から高い時期まで貯蔵しておくことによって得られる効用である。

---

(1) イギリスの経済学者 Daniel Defoe (1660?—1731) の書いた小説 “The Life and Strange Surprising Adventure of Robinson Crusoe, 1719” の主人公。

効用をもつ「もの」を経済学で**財** (goods) といい、「もの」に効用を**財** 与えることを**生産** (production), そして欲望を満足させるために効用を消滅させることを**消費** (consumption) という。

経済は人間によって営まれるものであるから、その主体は人間である。そして人間が生活するために必要とする財がその客体となる。財には空気や太陽熱のように、一般的にいてて貧富に関係なく誰にでも自由に得られるものと、そうでないものがある。前者を**自由財** (free goods), 後者を非自由財 (non free goods) というが、非自由財のうち他人に譲渡できるものを特に**経済財** (economic goods) といい、経済学で問題とするのはこれである。なぜならば、経済行為において、経済財以外の財はそれを入手し利用するのに少しの努力も犠牲も必要としないし、また他人との関係を生じることほとんどないからである。

今日のような複雑な経済社会では、経済財は必ずしも有形とは限らない。鉄道や空路などによる運輸、衣料品の縫製、医師の治療行為、ホテルや食堂の従業員のサービスなどのような無形の役務（これらを経済学ではサービス (service) と呼ぶ）や、営業権・債権・土地家屋の所有権などのような諸権利もまた有形のものと同じ意味で経済財とみなされるのである。

財にはまた人間の生活に直接役立つものと、間接に役立つものがある。パンや鉛筆は前者であって、これを**消費財** (consumption goods) という。ところが、紡織機や工作機は消費財を作るための財であり、これを**生産財** (production goods) という。しかしすべての財をこの二つのうちの何れか一方に分類してしまうことは不可能である。例えば1トンの石炭が、一般の家庭で暖房用に炊かれるときは消費財であるが、もしこれが生産工場で燃料としてボイラーに炊かれるならば生産財となるからである。

**経済原則**

われわれは日常生活や行為の中でいつも、最小の犠牲を払って最大の効果を得ようとする。これは一般の人間行為に見られる合理的傾向であるが、経済生活または経済行為では、その犠牲と効果は貨幣という媒体によって簡単に比較することができるので、この傾向は特に明らかとなる。そこでこれを経済主義とか経済原則 (economic principle) といい、歴史学派の経済学者はこの原則だけによって行動する「経済人」(homo economicus) なるものを想像した。経済人は一切の社会的習慣や人間としての感情を無視して、全く冷静に経済原則だけによって行動する人間であるが、現実の社会にこのような人間が存在することは到底考えられないところである。どんなに冷酷な人でも、「感情の動物」といわれる人間である以上、「親子の情」や、「無駄」、「ゆとり」、「余裕」などを全く無視することはないであろうし、またできないであろう。

なお「経済人」の行動は「極大原理」によるものであるが、われわれは常に相手の存在を考えて、後に述べる「ゲームの理論」的行動をする統計人 (statistical man) であり、またそうでなければならない。

**2. 経済学 (economics)****本質**

**科学 (science)** は百科辞典的知識ではない。ある項目に関する知識が一定の秩序のもとに研究され、整理・統合されて一つの体系に組み立てられたものである。その中で、自然界や自然現象に関するものが自然科学 (natural science) であり、社会という人間の集団生活に関するものが**社会科学 (social science)** である。そして経済学は、社会科学の中で主として人間の経済生活の面を扱うものである。

人間が長年月にわたる歴史的経験を経た結果、近代に至って、自然界や生活のいろいろな面について多くの法則を発見した。それらの法則の大部